

平成26年度宮古群島病害虫発生予報第1号(4月予報)

I 4月の気象予報

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	20	20	50
平年並	40	30	30
低い(少ない)	40	50	20

(平成26年3月13日付沖縄气象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
宮古群島(宮古島)	22.4	25.1	20.2	160.3	123.2

(沖縄气象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 4月の発生予報および防除上の注意事項

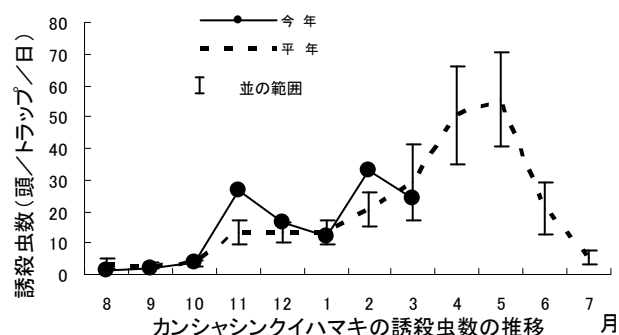
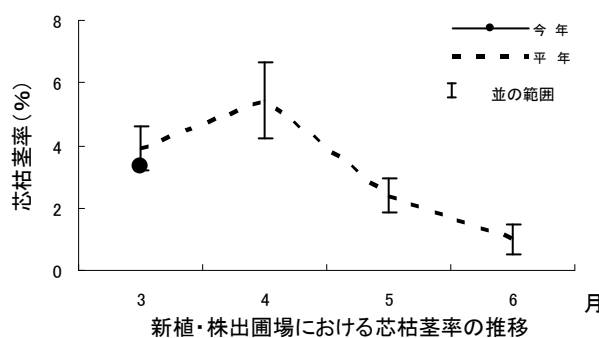
1 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生程度 : 並

予報の根拠

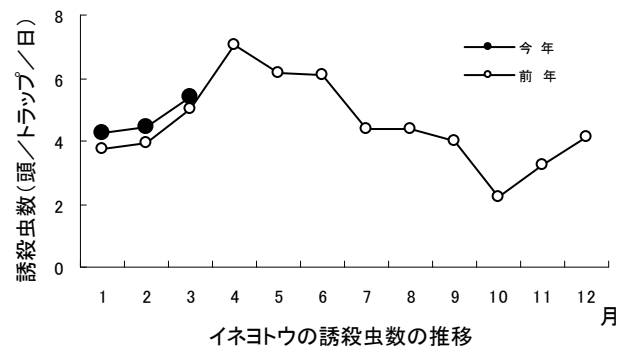
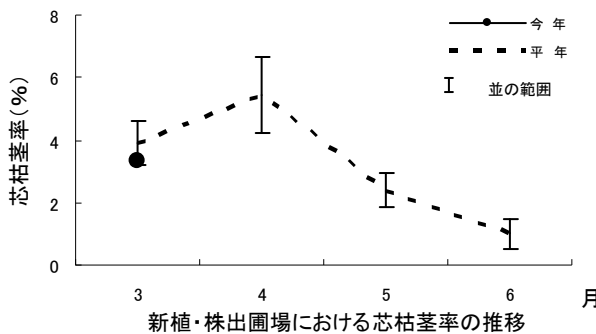
- a 3月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.3%(前年5.5%、平年3.9%)と平年並であった。
- b 3月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は24.1頭(前年30.1頭、平年29.4頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は、葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、生育初期の防除を徹底する。
- c 圃場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間に散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 植え付け時及び培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成24年度病害虫発生予察技術情報第3号参照(平成24年6月11日付)。

- イネヨトウの防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、春植・株出圃場における芯枯茎率は3.3%(前年5.5%、平年3.9%)と平年並であった。
 - b 3月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は5.4頭(前年5.0頭)であった。



<防除上注意すべき事項>

- a カンシャシンクイハマキの防除上注意すべき事項を参照。
 - b 平成25年度病害虫発生予報第6号(平成25年8月30日付)号コラム参照。
- カンシャコバナナガカメムシの防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、茎当たり虫数は0.8頭(前年0.1頭、平年36.1頭)と平年よりやや少なかった。
 - b 2~3月の気温に基づく、3月24日時点での防除適期は、宮古島で平年より1日程度、多良間島で4日程度遅いと予想される。
 - c この時期に茎当たり虫数が20頭を超える地域は一斉防除をすることが望ましい。
 - d 薬剤防除の際は周辺住宅地や隣接圃場に薬剤が飛散しないよう、風向きに注意する。

防除適期予想日(3月24日現在)

地域	防除適期	2.5齢期予想日		
		本年	平年	平年差
宮古島	4月8日~4月22日	4月15日	4月14日	1日遅い
多良間島	4月5日~4月19日	4月12日	4月8日	4日遅い

2 マンゴー

- 炭疽病の防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、発病枝率は13.6%であった。
 - b 本病の病原菌は花芽、花序、葉などにすでに潜在感染していることが知られており、収穫果実への被害軽減のため、今後袋がけ前までの防除対策が重要である。
 - c 罹病した新梢、残渣は速やかに施設外に持ち出し処分する。
 - d 結実期には治癒効果のある薬剤を選定し、定期防除に努める。
 - e 平成26年度病害虫発生予報第6号(平成26年3月24日付)号コラム参照。
- チャノキイロアザミウマの防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、葉あたり虫数は0.1頭未満(平年0.4頭)と平年よりやや少なかった。
 - b 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。
 - c 不用な新葉は本種の発生を助長するので、早い時期に除去する。
 - d 幼果が食害されると果実品質が低下するので、幼果時期の薬剤防除を徹底する。
 - e 発生源となる施設内外の雑草を除去する。
- ハダニ類の防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、葉あたり虫数は0.1頭(前年0頭、平年0.5頭)と平年よりやや少なかった。
 - b 今後気温の上昇に伴い増加する可能性がある。
 - c 多発すると果実も被害を受けるので、早期防除に努める。

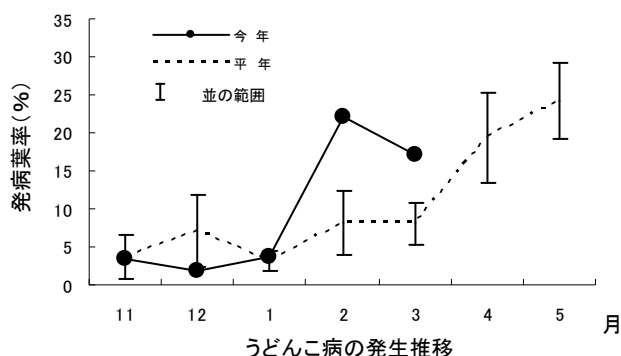
3 かぼちゃ

- モザイク病の防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、発病株率は4.4% (前年0%)であった。
 - b 媒介虫であるアブラムシ類の葉当たり虫数は0.79頭(前年1.43頭、平年0.66頭)と平年並であった。
 - c 圃場周辺に防風対策を兼ねた防虫ネット等の資材を利用して有翅虫の飛来侵入を防ぐ。
 - d 圃場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源になるので除草を行う。
 - e 発病株は発生源となるので、見つけ次第抜き取りビニール袋に入れるなどして密閉処理し、圃場外へ持ち出し処分する。
 - f 本病は汁液伝染するので、ハサミや手の消毒、洗浄を行う。
 - g 収穫後の残渣は発生源となるので速やかに片づける。
- うどんこ病の防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、発病葉率は55.0% (前年50.0%、平年63.1%)と平年よりやや低かった。
 - b 株元の老葉を除去し、透光・通風をよくする。
 - c 多発すると防除が困難になるので、葉の表裏をよく観察し、早期防除に努める。
 - d 着果後は防除を徹底し、収穫時まで出来るだけ多くの健全葉を確保する。
 - e 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

4 にがうり(施設)

- (1) うどんこ病
発生程度 : 多
予報の根拠

3月中旬の調査の結果、発病葉率は17.0% (前年4.2%、平年9.9%)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- a 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
 - b 除去した葉は圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
 - c 薬剤防除は予防散布に重点をおく。
- ミナミキイロアザミウマの防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、一部圃場で発生していた。
 - b 今後の気温上昇に伴い、本種の発生が増加することが予想される。
 - c 施設開口部には目合いの細かい防虫ネットを展張し、本種の侵入を防止する。
 - d 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
 - e 平成26年度病害虫発生予報第1号(平成26年3月24日付)号コラム参照。

5 とうがん(施設)

- ミナミキイロアザミウマの防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、葉あたり成虫数は0.1頭(前年0.2頭、平年0.3頭)、つる先あたり成虫数は0.8頭(前年0.8頭、平年1.4頭)と平年よりやや少なかった。
 - b 発生源となる圃場内外の雑草を除去する。
 - c 除去した寄主植物はビニール袋などに密閉し、施設外に持ち出し処分する。
 - d 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

6 オクラ

- うどんこ病の防除対策
 - a 3月中旬の調査の結果、発病葉率は29.8%であった。
 - b 老葉や病葉は発生源となるので、圃場内に放置せず、ビニール袋に入れるなどして持ち出し処分し、透光通風を良くする。